

マタイ5章4節「悲しむ者」

1A 罪に対する悲しみ

1B 「心貧しき者」の状態

2B 神の嘆き

1C エデンの園

2C カインへの言葉

3C ノアの時代の洪水

4C イスラエルの不従順

1D 金の子牛

2D ダビデの罪

3D 国の分裂

4D バビロン捕囚

5D イエスご自身の悲しみ

6D 悲しみの人

2A 真実な幸い

1B いま笑っている者

2B 本当は惨めな者

3B 世に似ようとする教会

3A 慰め

1B 罪の赦し

2B 肉体にある呻き

3B 世の贖い

本文

私たちの山上の垂訓の学びは、今日は、八福の二つ目の幸いについて見て行きたいと思いません。5章4節です、「**悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです。**」

1A 罪に対する悲しみ

1B 「心貧しき者」の状態

山上の垂訓の学びにおいて、私たちが初めに学んだことがあります。それは、イエス様の一連の教えは、道徳的に、社会的に当てはめやすいが、実は全く異なることを話しておられる、ということ。平和を造る者は幸いです。敵を愛しなさい、など、とても高尚な教えとして、しばしば世の中で引用されます。けれども、イエス様がそういった意味で語られているのでは全くないことを、初めに語り始められた言葉で私たちは知っています。3節の、「心の貧しい者は幸いです。天の御

国はその人たちのものだからです。」から始まりました。高尚な教えはありがたいと思っている人であっても、イエス様の冒頭の言葉を受け入れることは、全くできません。「心を豊かにすることこそが、幸福への道です。」と世は教えるからです。心を豊かにするのではなく、貧しくすることこそが、幸いな者の道であり、それによって初めて神の国の中に入ることができるとイエス様は教えておられます。

ここには、靈的に神との関係を持つ入口が教えられています。つまり、神の前には自分は何も良いものがない、まったく靈的には倒産状態だ。イザヤが、エルサレムの中にある不義を糾弾しながら預言していましたが、いざ、主の御座の幻が自分の前に現れたら、「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。(6:5)」こうやって、神に真実に出会った者には、自分の中にある圧倒的な絶望感が与えられます。つまり、自分の罪について、人間的な物差しではなく、神ご自身が御霊によって与えられる罪意識によって、自覚するのです。

そして、「**悲しむ者**」というのは、心を貧しくされた後の、自分の状態に対する悲しみのことを指しています。自分が罪を犯したことを知るのが、心貧しき者と言うことができますが、その罪を悲しみ、憎むことが「悲しむ者」ということができます。ところで、ここで言っている悲しみが、いわゆる事故で誰かを亡くしてしまった後の悲しみであるとか、そういった悲しみのことではありません。あくまでも、心貧しき者の後に来る悲しみであり、罪に対する悲しみであります。

ここにおいても、この世の基準とは根底から異なっています。人間の幸せの基準は、「悲しみ」から避けるということです。いかに人々が悲しまないようにするか、それが幸せへの道であるとなります。けれども、イエス様は正反対です、悲しむ者は幸いだと言われるのです。そして、慰められると言われますが、悲しむからこそ、その後にある喜びがあり、そこに幸いがあると教えています。

2B 神の嘆き

しかし、これから聖書的な「悲しみ」を眺めてみたいと思います。神は悲しまれる方であること、そしてその悲しみを自分自身も共有している時に、「悲しんでいる者」ということが言えることをお話しします。人が罪を犯し、世界が呪いの下に置かれたことについて、神はいつも悲しまれていました。

1C エデンの園

エデンの園の時のことを思い出してください。アダムとエバが罪を犯した後で、主の御顔を避けて二人が隠れました。主は、「あなたはどこにいるのか。」と言われました(創 3:9)。これを怒りながら話しておられるのではなく、悲しみと嘆きをもって語られています。ちょうど迷子を捜している親のように、泣いておられる声であります。

2C カインへの言葉

そしてアダムとエバの子であるカインが、弟アベルを殺した後も、「いったい、あなたは何ということをしたのか。声がする。あなたの弟の血が、その大地からわたしに向って叫んでいる。(4:10)」と主は言われました。これは、主ご自身の心が張り裂けるばかりの叫びとなって言われていることは間違いありません。

3C ノアの時代の洪水

そしてカインの子孫は、墮落しました。殺人を豪語していました。自分の道を乱して、思うことは悪に傾いていました。「それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。」とあります(6:6)。それで、地上から生きている者を水によって消し去ろうと言われましたが、そこにはご自分が造られてよしとされていた被造物が、乱れに乱れ切ってしまったことを嘆き悲しんでおられる姿なのです。私たちも、同じように心が痛まないでしょうか？日々、何か良いことは起こっていて、それは喜んでいますが、心のどこかで絶えず呻きがあります。それはノアの時代の神の思いと同じです。世が悪に傾いていることへの痛みです。

4C イスラエルの不従順

そして主は、ご自身の召しによって国を造ることを決められました。アブラハムを呼び出され、彼から子孫を起こし、国を強くし、そして全ての民が彼によって、また彼の子孫であるキリストによって祝福されるためです。ところが、その神の民が罪を犯したことによって、深い悲しみに沈みます。

1D. 金の子牛

シナイの荒野にあるホレブの山において、モーセが律法を受けている間に、麓では彼らが金の子牛を造り、そこで乱れていました。そしてモーセが麓に降りて、神が書かれた掟の板、石の板を粉々にしました。彼らが律法を既に破っていたからです。そして、彼らは飾り物をもう身につけていなかったと書いてあります(出エジプト 33:4)。起こってしまったことから、自分たちの偶像礼拝を悲しんで、捨てていたからです。

その後も、イスラエルの民は約束の地に入ろうとしていたのに、不信の罪に陥り、四十年間、荒野をさまよっていました。そして、ヨシュアによって約束の地に入ったものの、アカンが貪って金銀を隠して、彼を石打で取り除かなければいけませんでした。士師の時代には、イスラエルの民は、自分の目に正しいと思われることを行なっていました。これが恐ろしいですね、今の時代、自分の目に正しいと思われることが絶対だと思われる時代に生きています。主の前に悪を行なっていました。

2D. ダビデの罪

けれどもサムエルが主に拠って立てられ、霊的にイスラエルの民は立ち上がり、ダビデが神よっ

て選ばれて、エルサレムに契約の箱が置かれました。その時のイスラエルは栄えました。ところが、ダビデが罪を犯しました。そのために、彼の家にも剣が入って来て、アブシャロムが他の兄を殺し、またクーデターを起こして、ダビデの軍が戦わねばなりませんでした。悲しみが続きました。

3D. 国の分裂

そして神の憐れみと恵みによって、その子ソロモンが王となりました。しかし彼の死後、国が分裂しました。北イスラエルは、初代の王ヤロブアムの道に倣いました。そうです、ヤロブアムの道にならったということばを聞く度に、私たちの心に痛みが走ります。それは神の心でもあるのです。そして、アッシリアによって滅ぼされました。

4D. バビロン捕囚

けれども、ユダ王国も後に、バビロンによって捕え移されます。その時の預言者は誰でしょうか？そうです、エレミヤです。エレミヤは、「嘆きの預言者」と呼ばれました。彼の顔はいつも、はれぼったくなっていたのではないか？と思われます。涙が溢れて、涙が涸れて出てこないぐらい泣いたのではないか、と思われます。そして彼はエレミヤ書を残しただけでなく、哀歌を残しました。それは、涙から涙への歌であり、悲しむ者そのものであります。

七十年が過ぎ、ユダヤ人が帰還して、ネヘミヤの時代、エズラが律法を読み聞かせ、民の間から泣き声が聞こえていました。そう、律法に書かれていることで自分の父たちがどのような罪を犯してきたのか、そして自分たちがなぜ今、苦しい目にあっているかを悟ったからです。けれども、ネヘミヤとエズラは、「今日は、あなたがたの神、主にとって聖なる日である。悲しんではならない。泣いてはならない。」と呼びかけ、それで「主を喜ぶことは、あなたがたの力だからだ。」と言いました。そう、まさにイエス様がここで言われている「悲しむ者は幸いです。」というところですよ。

5D. イエスご自身の悲しみ

イエス様は、ある人々からはエレミヤではないのか？と言われていたようです。そうです、かつてバビロンに捕え移される民と同じように、心を頑なにし、神に背を向けるユダヤ人たちを見て、悲しんでおられたからです。そしてエルサレムに入城されて、都を眺めながら涙を流されました。エルサレムが破壊されることが見えておられたからです(ルカ 19:41-44)。

6D. 悲しみの人

このように、イエス様は悲しみの人でありました。それは、根暗であるとか、いつもめそめそしていたとか、希望を失っていたとか、そういったことではありません。罪が入って来てしまった世に対して、また神が選び愛されている民でさえ、神から目を背けてしまっていることがあり、それは、ある意味で絶えずある心の痛みであり、それから免れることはできないのです。神の民が主に完全に立ち返ること、また世が贖われることをなくしては、ありえないからです。イエス様はそれゆえ、

「悲しみの人」と呼ばれました。イザヤが預言しました、「彼は蔑まれ、人からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。(53:3)」

2A 真実な幸い

けれども、イエス様は、このように悲しむ人こそが、幸いであると言われました。なぜなら、罪に対して悲しまず、憎むことをしなければ、悔い改めはありえず、悔い改めがあって初めて罪からの解放、真実の喜びがあるからです。ゆえに、そのような悲しみを経ないで、ただ今、悲しまないことだけを求める、悲しむことを避けるのであれば、それは災いであるよ、とイエス様は言われます。

1B いま笑っている者

ここマタイの福音書にはありませんが、別に機会に同じ内容の説教をイエス様は行われました。ルカ 6 章に記録されています。そこでイエス様は、「今笑っているあなたがたは哀れです。あなたがたは泣き悲しむようになるからです。(6:25)」と言われました。そうです、将来の希望のために今、悲しむことを避けて、ただ笑っているだけであれば、それは哀れであります。表向きは笑っているかもしれませんが、本当に笑いではありません。心の中では神との平和を持っていないために痛みがあるのに、笑わなければいけないと思って笑っていたら、それは哀れです。

そこには、「富んでいるあなたがたは哀れです。あなたがたは慰めをすでに受けているからです。(6:24)」ともあります。今、自分の持っている物によって、自分の幸せを測ろうとするのがこの世であります。物を持っていること、自分の成功をどれだけ持っているかということ、人との関係でさえ自分の幸せを測る物差しになっていることでしょう。そして、自分の楽しみ、興奮するようなことを求めて、何か趣味にいそしんだりします。楽しむことは良いことです、けれども、それによって幸せを得ようとしていることには、その幸せは皮相的であり、真実なものではありません。

そもそも、幸せを第一に求めるということ自体が、人を不幸せにするでしょう。絶えず、幸せは逃げていきます。この罪ある世界に生きている限り、幸せは必ず得たと思ったら失われていきます。神の国とその義を求めなさいとイエス様は後に言われますが、神との正しい関係を求めて行くのであれば、必ず報いがあるし、副産物として、結果として幸せであります。それが、イエス様がここで言われている「幸いな者です」の意味です。

2B 本当は惨めな者

イエス様は、世に妥協しているラオディキアの教会に対して、このように言われました。「黙示 3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっている。」本当は惨めなのに、自分は富んでいる、豊かになったと自分を偽っています。けれども、それがこの世の姿ではないでしょうか？人々を見ると、一見、みな問題がなさそうに見えます。そして、自分で何とかするからという、

根拠のない樂觀によって今の自分を見ないようにしています。現実を直視しません。そして、何か今あるもので自分を楽しませようとして、その本質には触れないでおくというを行ないます。

3B 世に似ようとする教会

このように、世においては今、笑って、今、楽しくやっていくという哲学の中で生きています。その時に、教会が過ちを犯します。それは、この世にいる人々に届こうとして、自分たちもいっしょに笑い、いっしょに楽しくやらないといけないと思ってしまうことです。罪に対して悲しんでいることによて、教会には人々が来ることができないのでは？と考えてしまいます。そして、楽しいプログラムを用意しなければ、人々が来ないと思って、教会全体がそのような方向に進んでいってしまうことがあります。けれども、人々が来るようにすることが私たちの目的ではありません。

神の御心は、そのまま「悲しむ者は幸いです。」ということです。つまり、私たちの間がから真実な悲しみが出てきて、そこから悔い改めが起こっていくことです。そうすれば、自ずと人々はその世の光、血の塩として人々を引き付けることになり、人々が来ますが、自分たちで来させようと努力して、世の笑いを取り入れる必要はないのです。ヤコブは、教会の人々にそういった意味で悲しんでほしいと懇願しています。「嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。(ヤコブ 4:9-10)」

3A 慰め

イエス様は、言われました。「**その人たちは慰められるからです**」。悲しみが悲しみに終わりません。むしろ、幸いを得るのですが、慰めを得ることができるので、それで幸いになることができます。イエス様が、この地上に来られたことをイザヤは預言しました。「すべての嘆き悲しむ者を慰めるために。シオンの嘆き悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、嘆きの代わりに喜びの油を、憂いの代わりに賛美の外套を、着けさせるために。(61:2-3)」世においては、罪に対する悲しみを避けようとするので、惨めになります。けれども、神の国においては、罪に対する悲しみを持つので、神がその悲しみをそのまま喜びに変えられます。そこまでの深い慰めを与えられます。パウロが言いました、「神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。(2コリ 7:10)」後悔のない、救いに至る悔い改めです。

1B 罪の赦し

その慰めは、ずばり「罪赦される」からです。罪に気づき、罪を悲しむ時に、主はそのままその人の罪を赦し、全ての不義から清めてくださいます。「詩篇 32:1-2 幸いなことよその背きを赦され罪をおおわれた人は。幸いなことよ【主】が咎をお認めにならずその霊に欺きがない人は。」ダビデは、自分の罪が赦されたことを知って、心の中に救いの歓声が聞こえるとまで言っています(7 節)。私たちが、次の罪の赦しの宣言を聞いて、魂が喜ばないはずがありません。「詩 103:12 東が西か

ら遠く離れているように主は私たちの背きの罪を私たちから遠く離される。」そして、この救いを手にしているので、言葉に言い表すことのできない喜びに満ちています。「Ⅰペテ 1 章 8-9 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。あなたがたが、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからです。」

2B 肉体にある呻き

そして、私たちの悲しみは、罪の赦しが与えられた後にも続きます。なぜなら、私たちのこの肉体は、アダムから引き継いだものであり、魂は救われていても、この体の贖いは将来を待たないといけませんからです。「ロマ 8 章 23-24 それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだを贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。私たちは、この望みとともに救われたのです。」ですから、私たちは罪赦されたことを喜びながら、まだ呻いています。将来、主が戻って来られる時にこの体さえ贖ってくださるという希望を持っているから、今、救われています。必ず、体も贖われるのだと知っているのです、私たちは慰めを受けます。その希望によって、慰めを受けているのです。「Ⅰテサ 5 章 23-24 平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。あなたがたを召された方は真実ですから、そのようにしてくださいます。」

3B 世の贖い

そして、私たちはこの世界自体に、悲しみと呻きを持っています。社会が荒んでいます。どんどん、サタンの策略の中で動かされている人が増えています。それを見て悲しくなります。しかし、主がすでに勝利されました。十字架につけられ、三日目に甦られました。その福音によって、人々は変えられます。そして主は戻って来られて、全てのものを建て直されます。して、全てが新しくされて、私たちに究極の慰めが与えられます。「黙 21:4 神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」このようにして、罪の赦しについて、自分の体の贖いについて、そしてこの世界そのものの贖いがあることで、私たちは究極の慰めを受けることができます。悲しみが悲しみに終わることがありません。